

娘・妻・母

鑑賞日：2017・3・27

制作 1960 年 東宝

上映時間 123 分

監督 成瀬巳喜男

脚本 井手俊郎、松山善三

出演 三益愛子、高峰秀子、原節子、団令子、森雅之、宝田明、淡路恵子、
仲代達矢、加東大介、草笛光子、小泉博、杉村春子、太刀川寛、中北千枝子、
上原謙

(あらすじ)

東京、山の手の代々木上原あたり。その住宅街に坂西家がある。一家には、60 歳になる母親あき(三益愛子)を中心に、会社では部長の長男勇一郎(森雅之)と妻の和子(高峰秀子)、子供の善郎、それにブドウ酒会社に勤める末娘の春子(団令子)が住んでいる。また、商家に嫁に行った長女の早苗(原節子)は夫との仲がうまくいかず、夫が会社の慰安旅行中のため、実家に遊びに来ていた。早苗は、この里帰り中、夫を交通事故で亡くし、毎月、5 千円の生活費を入れて、実家に住みつくことになった。一方、勇一郎は、兄弟、姉妹に内緒で家を抵当にして借りた金を町工場をやっている妻の和子の叔父鉄本(加東大介)に融資し、その利息を生活の足しにしていた。更に鉄本から 50 万円の借金を申し込まれ、その金の用立てを早苗に頼んだ。早苗は承諾した。ある日、早苗、春子、次男の礼二(宝田明)と妻の美枝(淡路恵子)らは甲府のブドウ園に遊んだ。案内は礼二の友人の醸造技師の黒木(仲代達矢)。彼は早苗に好意以上のもの感じた。東京に帰って、早苗は母の還暦祝いを買いに銀座に出かけた。学友の菊(中北千枝子)に誘われて入ったフルーツパーラーで彼女の知り合いという身だしなみのよい中年の紳士、五条(上原謙)に紹介された。母親の還暦祝いの日、早苗に黒木から電話があり、二人は上野の美術館に行った。帰り道、二人は礼二のアパートに寄ったが、礼二が留守だった。礼二の部屋で黒木は早苗に接吻をした。

その頃、鉄本が勇一郎からの借金を踏み倒して失踪した。青くなった勇一郎は家族会議を開いた。母親にも内緒で家を抵当に入れ金を借りた兄の勇一郎を兄弟たちは責めたが、勇一郎はただあやまるばかりである。二週間後にはこの家を出なければならなくなった。家族会議は母親あきの面倒を誰が見るかに話が及んだ……

(解説)

東京の山の手の中産階級の一家を題材にして、家族間の人間関係のやりきれない複雑な側面を描いた成瀬巳喜男監督のホームドラマである。脚本は東宝の中堅作家の井手俊郎と高峰秀子の夫君の松山善三が担当したオリジナルである。

当初、『豪華絢爛 17 人の大スター登場』の触れ込みで映画は作られたが、いかにも登場人物が多すぎる。坂西家の子供は 5 人、長女と三女以外はそれぞれの妻や夫が加わり、嫁、姑の軋轢や、夫の浮気も盛り込まれたため、物語の展開が混乱する。一見、何の不自由もない平和な家庭でも、金銭がからむと親子、兄弟の間でもトラブルが生ずるという冷めた成瀬監督の狙いも生かされず、中途半端な作品となった。長女早苗を演じた原節子は当時 40 歳。小津作品とは異なり、暖かな、人間味に富んだ演技を見せてくれた。